

日経MJ 2017年 / 月 / 日 付

和装ファッションへの期待

年始から成人式、卒業式と、女性の着物姿を見る機会が増える季節だ。若い女性の晴れやかな着物姿を見るとなんとなく癒やされた気分になる人は多いはずだ。晴れ姿というので特別な日だという意識になるだけでなく、日本の伝統を感じる事ができる瞬間でもある。

晴れ姿というのであれば、ドレスを着るといふこともあるだろうが、正月や成人式でドレスを着た女性が街を闊歩(かっぽ)するといふのは何となくピンとこない。結婚式などではドレスを着てくる女性も多いが、そうした女性が式の帰りに地下鉄のホームにドレス姿で立っているのを見るのは何となく違和感がある。これは私のドレスに対する偏見なのだろうか。結



伊藤元重の

エコノウオッチ

婚式帰りの女性が着物姿で駅にいても、まったく違和感を感じないのだが。

日本の着物の市場は縮小を続ける一方だった。男性が着物を着ることは稀(まれ)なことだろう。多くの女性にとっても結婚式や成人式や卒業式といった晴れ舞台で着る特別なものだった。生活が欧米化する中で、着る物が洋服に変わることは自然なことなのかもしれない。しかし、そうしたことに寂しさを感じている人は少なくないはずだ。着物には日本の伝統が凝縮されている。そうしたものが市民の生活から消えて博物館の中に押し込まれるのは寂しいではないか。

しかし、最近になって、こうした流れに少し変化が出てきたような気がする。夏のお祭りでは、浴衣を着

日本の衣の伝統、価値多大

る女性が急速に増えていく。着物の専門店だけでなく、ユニクロや丸井やイオンのような店でも積極的に浴衣を売っている。浴衣が入り口になったのか、低価格の着物を気軽に着る女性も増えてきたということも聞く。

一生のうち何度か特別の日に着る晴れ着ではなく、ちょっとしたおしゃれに着物を着てみる。そうした女性も増えているようだ。それにつられてか、着物を着る若い男性も増えてきている。まだ、「新撰組」か「暴れん坊将軍」を想像させるような着物姿も多いが、これももう少し慣れてくれば、ファッションとしての着物が男子にも広まってい

くのではないかと期待している。

た。著者の一人が言うのも気が引けるが、非常に面白い書籍になったと思っ

る。矢嶋氏と対談を何度も繰り返したが、そこで様々なことに気づかされた。ファッションや消費文化についてはもちろん、産地でのものづくりから小売業のあるべき姿についても考えさせられることが多かった。衣食住は生活の基本である。食の世界では和食が海外でも注目されているが、衣や住の世界でも、日本には素晴らしい伝統があり、それは西欧化した現代だからこそ、存在意義が大きい。論語に、「君子は和して同せず。小人は同して和せず」という故事がある。グローバル化の世界では、全てが同一化するのはなく、日本の伝統に基づくものにこそ価値が生まれるという面もあるのだ。

昨年末に、やまと会長の矢嶋孝敏氏と、『きもの文化と日本』(日本経済新聞出版社)という本を出版し

部教授)